

男子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究

濱口, 純一 / YAMADA, Kai / HAMAGUCHI, Junichi / YOSHIDA, Yasunobu / 山田, 快 / 吉田, 康伸

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of sports research center, Hosei University / 法政大学スポーツ研究センター紀要

(号 / Number)

36

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

2018-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014582>

男子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究

The research in the ways they attack patterns on men's volleyball.

吉田 康伸 (法政大学経営学部)
Yasunobu Yoshida
濱口 純一 (法政大学兼任講師)
Junichi Hamaguchi
山田 快 (法政大学経済学部)
Kai Yamada

要 旨

本研究では、男子バレーボールにおける攻撃パターンの傾向について、2017年男子ワールドグランドチャンピオンズカップの日本戦のうち、VTR録画した10ゲーム、34セットを対象に、後日再生して私案の記録用紙に記録し、集計作業を行った。測定した項目は①攻撃種類の分類、②ポジション別のバックアタック、③攻撃パターンの分類で、それぞれコンビネーション攻撃の出現率、打数の出現率、決定率などを算出し、日本チームと日本チーム以外の二つを比較検討しながら考察を進めた。結果として、男子バレーボールにおいてはほぼ全てのコンビネーション攻撃の中にバックアタックを組み込んでいることが明らかになり、同時にフロントとバックプレーヤーを合わせた4人攻撃もほぼ全てに出現していたことが明らかになった。またバックアタックは一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛けるWBAの打数が多数を占めた。戦術的には日本チームとそれ以外の世界上位チームに差はみられず、既に攻撃戦術についてはこれ以上ないレベルにまで行きている部分もあるため、今後はよりスピーディーで精度の高いプレーが求められることになると予想される。

キーワード：Back Attack (バックアタック) . Combination Attack (コンビネーション攻撃)

1. はじめに

現在のバレーボールは、1947年に国際バレーボール競技規則が制定されて以来、攻守のバランスを保つためや判定の統一化、メディア戦略を意識しての時間短縮などのルール改正を積み重ねて発展を遂げてきた。

それと同時に技術的な戦術も進化し、中でも最も多くの得点を占めるスパイク技術はゲームの勝敗に大きな影響を及ぼし、またそれを防ぐブロック・レシーブの技術向上に伴い攻撃戦術も進化を遂げ、速攻を含めたコンビネーション攻撃や時間差攻撃などが開発されてきた。

さらにバックプレーヤーがアタックラインの手前でジャンプし、空間差(前方への空中移動)を利用して攻撃を仕掛けるバックアタックが現在では攻撃戦術として定着してきている。

そこで本研究では2014年の世界選手権大会を標本として研究をした女子に続き、身体能力の違いから常に技術・戦術が先行している男子について、特にバックアタックがコンビネーション攻撃の戦術としてどのように取り入れられ、実際にどういったパターンで使われているかに観点を置き、ゲーム分析を通して検討していくことにした。男子バレーについては

およそ20年前の国内リーグを標本とした研究もしているのも、その当時との比較についても同時に検討していく。

2. 用語の定義

① 表1にトスの高さ、またはセッターの手からボールが離れてから、アタッカーが打つ瞬間までの時間によって攻撃群を分類した。

② WBA (ダブルバックアタック)

一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛ける攻撃をいう。

③ F集

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターを境にその前方、あるいは後方にフロントプレーヤーを集めるようにコンビネーションを組むことである。

④ F分

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターの前方、後方にフロントプレーヤーを分散させるようにコンビ

表1 各攻撃群の分類

攻撃群	テンポ	攻撃種類
速攻群	ファーストテンポ	A, B, C, D (ブロード攻撃含む) の速攻
時間差群	セカンドテンポ	両サイド平行 ダブル 前セミ 後ろセミ 1人時間差 バックアタック (コンビネーション)
オープン群	サードテンポ	バックアタックを含む全てのオープントス (ハイセット攻撃)
その他		二段攻撃 (ツー攻撃) ダイレクトスパイク

ネーションを組むことである。

⑤ FWQ

フロントのコンビネーション攻撃のうち、二人のフロントプレーヤーが同時にファーストテンポ (速攻) の攻撃を仕掛けることをいう。

⑥ CONB 出現率

バックアタックに関する出現率で、コンビネーション攻撃の中にバックアタックが組み込まれた全ての打数を、全体のコンビネーション数で割った割合のことである。

⑦ 打数出現率

バックアタックに関する出現率で、バックアタックの打数として出現した数を、全体の攻撃打数で割った割合のことである。

3. 研究方法

① 標本

本研究の標本は、2017年男子ワールドグランドチャンピオンズカップの日本戦のうち、VTR録画した10ゲーム、34セットである。

② 測定方法

本研究は、データを収集するために、ゲームを一度DVDに録画し、後日再生して私案の記録用紙に記録し、集計した。測定した項目は以下の通りである。

・攻撃種類の分類

攻撃の種類 (コンビネーション攻撃) をフロントとバックに分け、フロントにおいてはファーストテンポ、セカンドテンポ、その他の3項目に集計した。

・ポジション別のバックアタック

ポジションごとにバックアタックの出現を集計した。

・攻撃パターンの分類

一回ごとのコンビネーション攻撃について、その組み合わせによって攻撃パターンを分類した。

以上の項目について、コンビネーション攻撃の出現率、打数の出現率、また攻撃パターンについては決定率を算出した。

4. 結果及び考察

ここでは男子バレーボールにおける攻撃パターンの傾向やバックアタックの出現率、決定率などについて、2017年ワールドグランドチャンピオンズカップでの日本チームと日本チーム以外の二つを比較検討しながら考察を進めていく。

1) 攻撃種類の出現率についての比較

本研究において、対象となった日本チームとそれ以外における全ての攻撃打数は、日本チームでは435本であり、一方日本チーム以外では404本であった。このうちハイセット攻撃 (サードテンポ) を除いたコンビネーション攻撃の総打数は、それぞれ269本 (日本チーム)、272本 (日本チーム以外) であった。図1は攻撃種類の打数出現率を示したものであるが、コンビネーション攻撃中、最も出現率の高かった攻撃は、どちらもフロントのセカンドテンポ (時間差群) の攻撃であった。バックアタックについてはどちらも約4本に1本 (日本

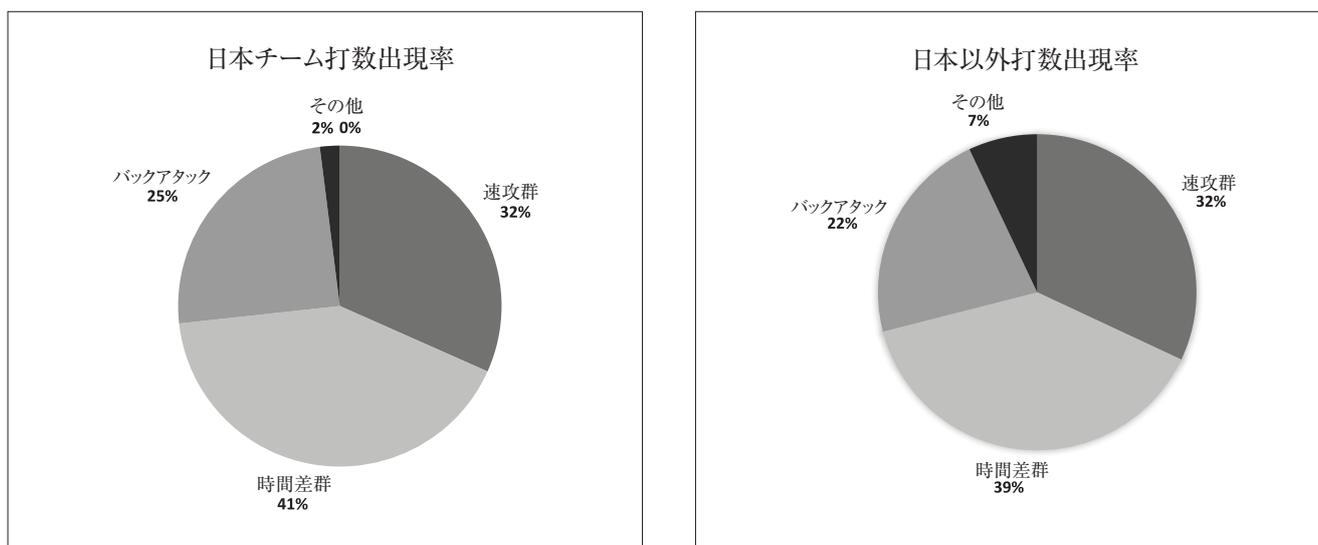


図 1 攻撃種類

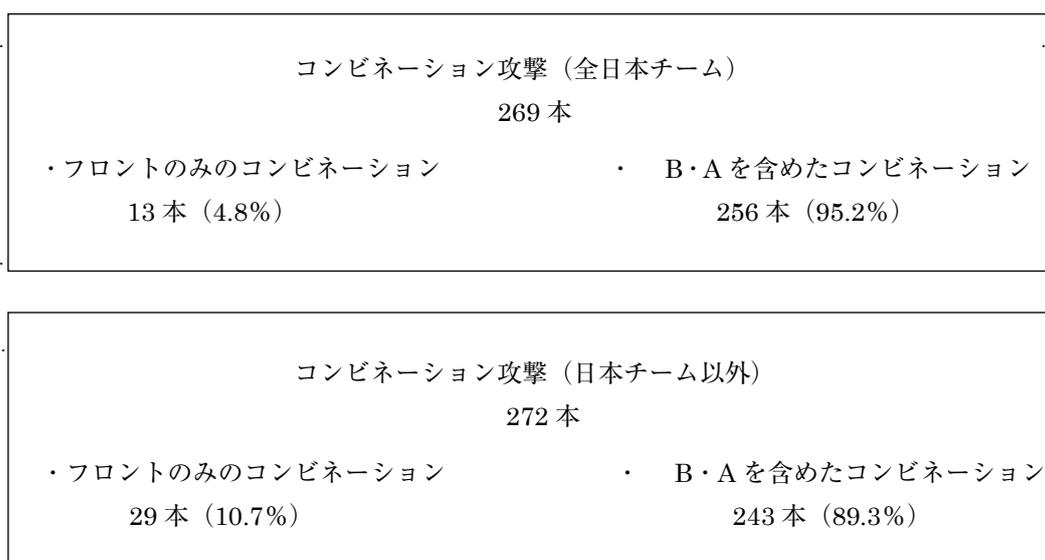


図 2 コンビネーション攻撃

チーム・25.0%, 日本以外・22%) の割合で出現し、積極的にバックアタックを取り込んでいることが明らかになった。

またファーストテンポ（速攻群）についてはどちらも約3本に1本（32%）の出現であった。日本チームの世界ランキングが大会当時12位であったのに対し、他の5チームが全てランキング1桁の上位チームではあったが、特に攻撃種類に関しては大きな差はみられなかった。

決定率についてはノーブロックで打つ機会の多いダイレク

トスパイクやツター攻撃といったその他を除くと、どちらもファーストテンポ（速攻群）の決定率が一番高かった。やはり速攻に関してはブロックに複数枚付きにくく、セッターの上げたトスをすぐに打つためにレシーブの態勢も整わないこともあり、決定率が高かったといえる。ただし日本チームのバックアタックの決定率を除き、セカンドテンポやバックアタックの決定率も高く、特に日本チーム以外のトップレベルでは大きな差はなく、全て決定率60%を超えており、バック

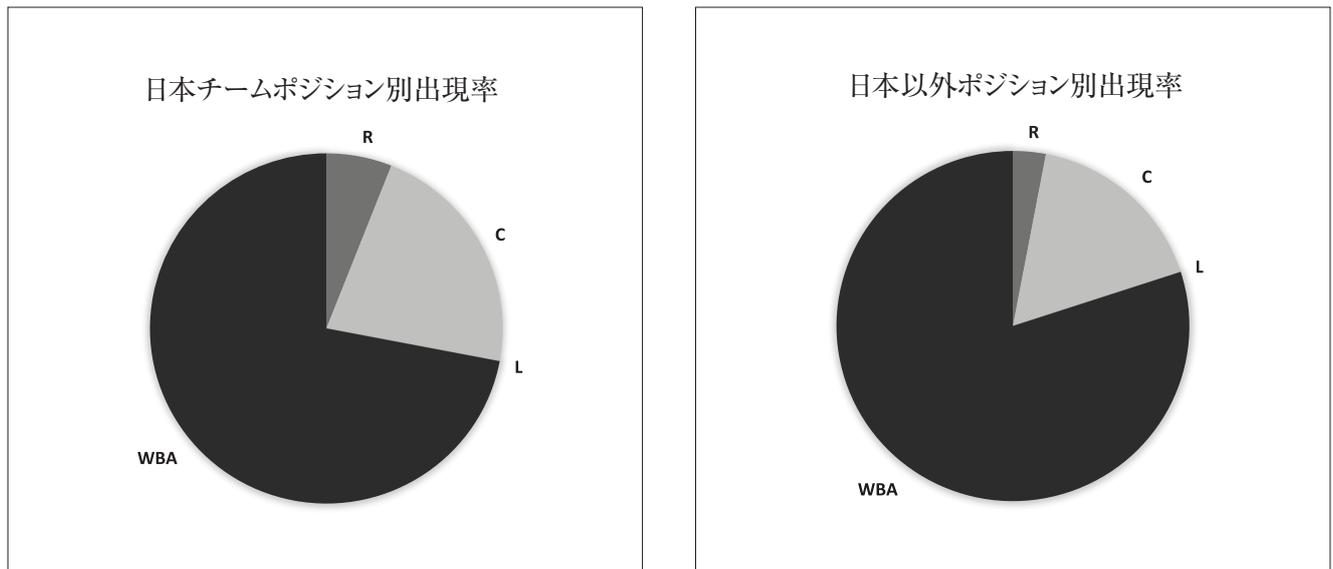


図3 ポジション別のバックアタック

アタックもバックプレーヤーが行うものであるが、効果的な攻撃技術として定着してきたといえるだろう。

また図2はコンビネーション攻撃をフロントのみのコンビネーション攻撃とバックアタックを含めたコンビネーション攻撃に分類したものであるが、日本チームとそれ以外の両者ともほとんどバックアタックを含めたコンビネーション攻撃(95.2%, 89.3%)であった。

以上のように男子バレーにおいては、ほぼバックアタックが組み込まれた攻撃が使われており、わずかに出現したフロントのみの攻撃もダイレクトやツーアタック、また通常はバックアタックを仕掛けるプレーヤーがレシーブによって態勢を崩されて、攻撃に参加できなかったものであるため、1980年代からみられているセッターの対角(オポジション)に強打者を配置するシステムに加え、その他のサイドのプレーヤーも全てバックアタックを仕掛けるようになり、フロントの攻撃者が二人の場合にその少ない攻撃者の数を補う目的という従来のものから、今やフロントとバックを区別するものでなく、通常の攻撃手段としてバックアタックが定着したものと考えられる。

2) ポジション別のバックアタックについての比較

コンビネーション攻撃におけるバックアタックをポジション別に分けたものが図3であるが、両者ともに一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛けるWBA(日本72%, 日本以外80%)の打数が多数を占めた。このコンビは、現在リベロプレーヤーが

バックに1人配置されていることもあり、フロントの攻撃者が2人の場合のみに出現した攻撃であった。

次に打数が多かったものはセンターポジションからのバックアタック(日本22%, 日本以外17%)であった。これはWBAとは対照的にフロントの攻撃者が3人の場合のみに出現した攻撃であった。

その他のポジションについては、ライトポジションからのバックアタック(日本6%, 日本以外3%)の打数がわずかに出現していたが、これは通常WBAを仕掛ける場所であったもので、1人がレシーブによって態勢を崩されて、攻撃に参加出来なかった際に発生したものと考えられる。

レフトポジションからのバックアタックは、両者とも全く出現しなかった。レフトポジションについては、フロントの攻撃が全てレフトから仕掛けられているため、バックアタックが出現しなかったといえるだろう。前回研究した女子バレーボールにおいては複数人数でバックアタックを仕掛けるというWBAについては、ほぼ浸透していなかったが、男子バレーボールにおいては、既に定着したものといえるだろう。

3) 攻撃パターン別についての比較

次にバックアタックを含むコンビネーション攻撃をパターン別に分けたものが、表2、図4である。バックアタックとフロントアタックを合わせた全てのコンビネーション攻撃のうち、フロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、2人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛ける「F集WBA」は、日本チームの打数の出現率が72%、日本

表2 パターン別のコンビネーション攻撃

日本チーム	CONB	打 数	決 定	C 出現率	打出現率	決定率
F 集 B 外	7	4	2	3%	6%	50.0%
F 分 B 中	137	14	5	54%	22%	35.7%
F 集 WBA	112	47	24	43%	72%	51.1%
FWQB 外	0	0	0	0%	0%	0%
計	256	65	31			47.7%

日本以外	CONB	打 数	決 定	C 出現率	打出現率	決定率
F 集 B 外	12	2	2	5%	3%	100.0%
F 分 B 中	103	10	8	42%	17%	80.0%
F 集 WBA	128	48	30	53%	80%	62.5%
FWQB 外	0	0	0	0%	0%	0%
計	243	60	40			66.7%

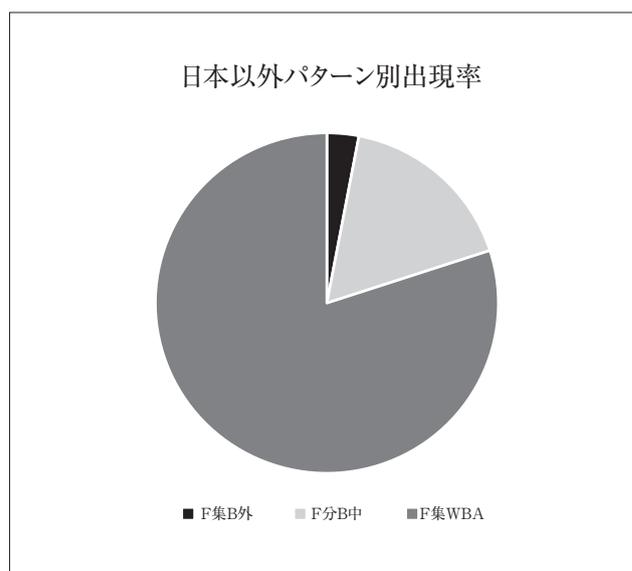
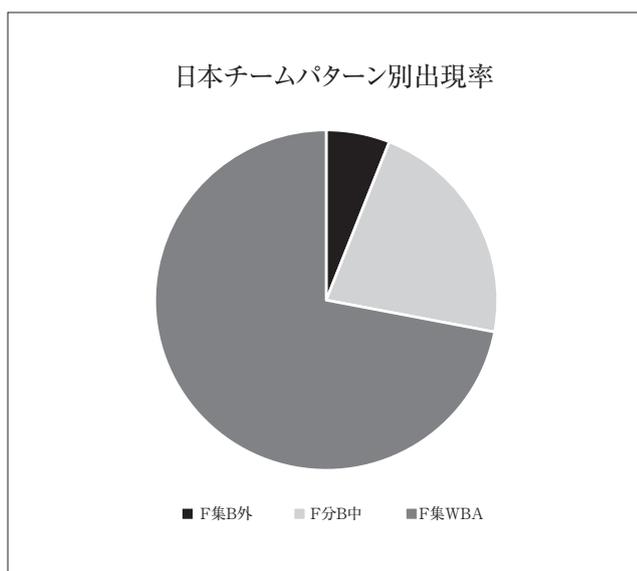


図4 パターン別のコンビネーション攻撃

チーム以外が80%で最も高かった。このパターンはポジション別のWBA同様、フロントの攻撃者が2人の場合のみに出現した攻撃であった。

次に打数の出現率が高かったのは、フロントのコンビネーションがレフト、ライトと両サイドに分散して、センターのバックゾーンからバックアタックを仕掛ける「F分B中」で、日本チーム・22%、日本チーム以外・17%であった。このパターンはポジション別のセンターポジションからのバックアタック同様、フロントの攻撃者が3人の場合のみに出現した攻撃であった。

またフロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドからバックアタックを仕掛けるという「F集B外」はほとんど出現せず、フロントの攻撃者がダブルクイックに入り、その外側からバックアタックを打つ「FWQB外」は両者とも0%と全く出現しなかった。

このようにパターン別でみるとフロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、2人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛ける「F集WBA」が最も多く、「F集B外」や「FWQB外」といったパターンの出現は皆無に等しいものであった。

相手ブロッカー3人に対してフロントとバックプレーヤーを合わせた4人が攻撃を仕掛けるという複雑なコンビネーション攻撃は、男子バレーボールにおいてほぼ浸透し、攻撃戦術として定着したといえるだろう。

5. 結論

以上のような結果から、男子バレーボールにおける攻撃パターンは、ほぼ全てのコンビネーション攻撃の中にバックアタックが組み込まれ、フロントとバックプレーヤーを合わせた4人攻撃という複雑なコンビネーション攻撃もほぼ全てに出現していたことが明らかになった。

このように男子バレーボールにおいては4人攻撃が定着し、しかもセカンドテンポといわれるサイドへの平行トスやバックアタックのトスなども、ファーストテンポと変わらないスピードで攻撃が展開されるようになってきているため、セッターがほぼ定位置からセットアップ出来るレシーブボールが返球(Aパス)されてしまうとブロッカーが3人では数的不利が生じ、攻撃側が圧倒的有利で高い決定率を出す状況となっている。

こういったセッターが定位置からトスアップ出来る状況を作り出さないようにするため、各チームともミスリスクは高いが、スパイクとほぼ変わらない強烈なジャンプサーブを半数以上のプレーヤーに打たせている(チームによっては6人全員がジャンプサーブを打っている)ことが、現在ではトップレベルにおいて主流であるといえる。

したがって現在の男子バレーボールにおいては、Aパスから展開されるスパイクの決定率の差はあまりなく、勝敗を左右する要因としては、レシーブボールが乱れた状況から攻撃が繰り出されるサードテンポ(ハイセット)のスパイク決定率の差によって決まるともいえるだろう。ただしサードテン

ポといわれるオープントスも現在では高い放物線を描くものではなく、速い平行トスに変化してきている。

日本チームにおいても格上の上位チームと比較して、採用している攻撃戦術(バックアタックを含めた4人攻撃)はほぼ同じであるが、各プレーヤー個々の高さやパワーといった決定力やチームのブロック力の違いもあり、上位チームとのスパイク決定率の差が約10%以上あったため、全敗という結果に終わってしまったと思われる。

本研究は、男子バレーボールにおける攻撃パターンについて、各コンビネーション攻撃の出現率やバックアタックのポジション別の出現頻度について調査し、それをもとにどのようなパターンでコンビネーション攻撃が行われているかを検討してきた。男子バレーボールについては、女子のバレーボールと比較してバックアタックの打数や4人攻撃の出現率が大きく上回り、ほぼ全てのコンビネーション攻撃の中にバックアタックが組み込まれていることが明らかになった。また過去の研究で1995年度の国内男子Vリーグレベルにおいても調査をしたが、バックアタックの打数や4人攻撃、バックアタックを含むコンビネーション攻撃の出現率全てにおいて、本研究の標本が大きく上回っており、攻撃戦術は確実に進化を遂げていることが証明された。

既に攻撃戦術についてはこれ以上ないレベルにまで行きついている部分もあるため、今後はよりスピーディーで精度の高いプレーが求められることになると予想され、サーブに関しても男子においては強烈なジャンプサーブが導入されており、今後もこの状況は変わらないものと考えられる。さらにチャレンジシステムが定着してくると正確な判定が下されることで、より細かい技術も要求されるようになるであろう。

2017年にテストマッチとして、ラリーポイント制15点7セットマッチやジャンプサーブの着地をエンドライン後方にさせるなどのルールで行われたが、このようなルール改正が行われた場合は、またプレーにおける技術・戦術の変化がみられることが予想される。

参考文献

- 大修館. (2014) 「スポーツルール2014」. 大修館書店, 80-98
- 日本バレーボール学会 (2010) 「バレーベディア・バレーボール百科事典」. 日本文化出版
- 日本バレーボール学会 (2012) 「バレーベディア・バレーボール百科事典2012年改訂版」. 日本文化出版
- A・セリンジャー (1993) 「パワーバレーボール」. ベースボールマガジン社
- 吉田康伸, 上田実, 富田公男, 田村義男 (1996) 「バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究」. 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第14号, 1-9
- 吉田康伸, 中西康己, 重永貴博, 今丸好一郎 (1999) 「バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究②」. 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第17号, 39-47

吉田康伸 (2003) 「バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究」. 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第 21 号. 23-26

吉田康伸, 濱口純一, 増山光洋, 山田快 (2011) 「バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究②」. 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第 29 号. 11-14

吉田康伸, 濱口純一, 山田快 (2016) 「女子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究」. 法政大学スポーツ研究センター紀要第 34 号. 5-10